

記念シンポジウム「希望の社会は“わたしたち”にある」

～ライフステージとそれぞれの男女共同参画～

コーディネーター 沖陽子岡山大学副学長

パネリスト 光畑由佳 授乳服メーカー「モーハウス」代表

渥美由喜 内閣府少子化危機突破タスクフォース政策推進チームリーダー

伊東香織 倉敷市長

誰もが輝ける働き方とは？希望の社会とは？ 沖副学長は今日のテーマは素敵な言葉であると紹介した。光畑氏は人に任せず、自分で解決できることを行動に移してきた。それが授乳服の開発につながった。人前で授乳することが抵抗なくできるようになったことで可能性が広がった。子連れ出勤は働く母もその子も、子どもを持つことと働くことと両立することを学び、これが未来への希望につながると思った。渥美氏は認知症の父は孫には優しく、父を介護している私は子どもがいるから介護が楽になり、父がいるから子育てが楽になっているとの言葉から、見方を変えることで希望が生まれることを示した。また数少ない女性市長である伊東氏は、介護や子育てがあるという女性を管理職にしたところ、素晴らしい面を発揮していると紹介した。期待されて市長に就任した経緯を踏まえ、みんなと共に前進していくこと、男女共同参画社会もまちづくりもまさに「希望の社会は“わたしたち”にある」と実感していると述べた。

本年は男女雇用均等法制定 30 年、女性活躍推進法が成立した。他人事にせず、私たち一人ひとりが社会を変えていく主体者に！と決意を新たにすることができた。 (文責 中原淑子)

「日本女性会議 2015 倉敷」に約 2100 人が参加

「“わたしたち”が行動を起こし、明日（あす）の日本を変えていきます」と大会宣言を採択。



10月9日からの3日間、全国から約2100名の方々が参加され、おもてなしの心にあふれた活気ある会合となりました。

倉敷駅から各会場まで、鮮やかなピンクのフラッグと、同色のTシャツを着た多くの市民ボランティアが笑顔でお出迎え。市をあげた歓迎ムードの中、実行委員会による大会運営は、おもてなし委員会と約760人の市民ボランティアに支えられ、全国の参加者から感謝と感動の声が。倉敷会議オリジナルのジーンズバッグも大好評でした。

武内陶子、上田紀行夫妻による記念講演、今回初めて分科会のテーマとして取り上げたセクシャルマイノリティほか、子育てや防災、DVなど様々なテーマで、現状の把握や課題への解決策について議論がされました。

性別にとらわれず、それぞれの個性を受け入れ、ひとり一人の能力が十分に発揮できる誰もが輝く社会の実現を目指すことを盛り込んだ大会宣言で、“わたしたち”が行動を起こし、明日の日本を変えていくことを誓い合いました。

新しい時代の、新しい男女共同参画社会を“わたしたち”の手で推進し、そして、次の世代に繋いでいきましょう。 (文責 新垣敦子)